

『児童と宗教』(改題誌『青少年と宗教』を含む)

全15巻・別冊1「復刻版」

真宗大谷派(大谷派本願寺社会課) 発行 一九二二年〜一九三七年

解説 佐賀枝夏文(大谷大学教授)

推薦 長谷川匡俊・谷川穰

体裁 A5判・B5判(第7巻)・上製・総約7、800頁

揃定価 本体285、000円+税

別冊 解説(佐賀枝夏文)・総目次・索引

(別冊のみ分売可) 本体2、000円+税 ISBN978-4-8350-7543-3

原本提供 大谷大学図書館・佐賀枝夏文氏

東京大学大学院法学政治学研究科附属明治新聞雑誌文庫



大谷健児団京都聯盟年始風揚げ大会

配本	復刻版巻数	原本巻号数	原本発行年月	揃価格	ISBN	配本年月
第1回配本	第一巻	第一巻第一号〜第二巻第八号	一九二二年四月〜一九二三年八月	95,000円+税	978-4-8350-7524-2	2013年12月
	第二巻	第二巻第九号〜第三巻第一二二二	一九二三年九月〜一九二四年二月			
	第三巻	第四巻一号〜第五巻第三号	一九二五年一月〜一九二六年三月			
	第四巻	第五巻第四号〜第六巻第六号	一九二六年四月〜一九二七年六月			
	第五巻	第六巻第七号〜第七巻第九号	一九二七年七月〜一九二八年九月			
第2回配本	別冊	解説・総目次・索引		95,000円+税	978-4-8350-7531-0	2014年5月
	第六巻	第七巻第一号〜第八巻第五号	一九二八年一月〜一九二九年五月			
	第七巻	第八巻第八号〜第九巻第一二二	一九二九年九月〜一九三〇年二月			
	第八巻	第一〇巻第一号〜第一一巻第一二二	一九三一年一月〜一九三二年二月			
	第九巻	第一二巻第一号〜第一三巻第一号	一九三三年一月〜一九三四年一月			
第3回配本	第一〇巻	第一三巻第二号〜第一三巻第七号	一九三四年二月〜七月	95,000円+税	978-4-8350-7537-2	2014年10月
	第一一巻	第一三巻第八号〜第一四巻第一号	一九三四年八月〜一九三五年一月			
	第一二巻	第一四巻第二号〜第一四巻第八号	一九三五年二月〜七月			
	第一三巻	第一四巻第九号〜第一五巻第一号	一九三五年八月〜一九三六年一月			
	第一四巻	第一五巻第二号〜第一五巻第一〇号	一九三六年二月〜一〇月			
	第一五巻	第一五巻第一一号〜第一六巻第八号	一九三六年十一月〜一九三七年八月			

※第二巻第一〇号より『青少年と宗教』と改題
※第七巻第三・一〇号、第八巻第六・七号、第一〇巻第一・九号、第一五巻第四号は欠号

真宗大谷派(大谷派本願寺社会課) 発行 一九二二(大正一一)年〜一九三七(昭和一二)年

児童と宗教

全15巻・別冊1「復刻版」

(改題誌『青少年と宗教』を含む)

体裁 A5判・B5判/上製本/総約7、800頁

解説 佐賀枝夏文(大谷大学教授)

推薦 長谷川匡俊・谷川穰

原本提供 大谷大学図書館・佐賀枝夏文氏

東京大学大学院法学政治学研究科附属
明治新聞雑誌文庫

別冊 解説・総目次・索引

価格 揃定価285、000円+税

第1回配本(第1〜5巻+別冊) 本体95、000円+税、'13年12月刊行
第2回配本(第6〜10巻) 本体95、000円+税、'14年5月刊行
第3回配本(第11〜15巻) 本体95、000円+税、'14年10月刊行



日曜学校花祭り記念写真

戦前期、宗教と社会の接点として隆盛を極めた「日曜学校」の機関誌。
「教育と宗教」のあり方を示す重要資料を復刻!

不二出版

〒113-0026
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替001600294084

●表示価格はすべて税別。

主要執筆者一覧

藍川徳成・浅野研真・蘆谷重常・阿部恵水・阿部現亮・
内山憲堂・大河内了悟・大崎治部・柏樹 修・金津正格・
北川秋翠・楠原祖一郎・栗田恵成・久留島武彦・小谷徳水・
小山乙若丸・左藤義詮・高田良信・高濱哲雄・武内了温・
竹中慧照・玉川玉浪・田村克己・友松円諦・豊満春水・
籙 含雄・那須正人・生江孝之・蜷川龍夫・野口雨情・
野原敏雄・野間 修・橋川 正・幡谷淳信・福井直秋・
福永勇賢・藤田正雄・間野敬重・松美佐雄・水戸愛川・
水戸憲道・山中文雄・山本正文・吉田 弘・渡辺千秋

復刻の辞

『児童と宗教』及びその後継誌『青少年と宗教』は、真宗大谷派京都本山に設置された社会課において、武内了温（一八九一—一九六八）が事業として推進し、戦前の宗教と社会の接点として隆盛を極めた「日曜学校」の機関誌である。

「社会課」は一九二二（大正一〇）年に設置され、宗派内に置かれた社会活動の発信基地としては仏教界のさがけとなったものであり、時代は仏教教団それぞれがこぞって社会貢献、社会活動へ関心を向けた時期である。

同年、社会課の主事として活動をはじめた武内は、慈善事業が篤志家の余枝を脱するべく、また社会事業の専門性を有した人物を育成するため「社会事業講習会」を開催し、わが国における社会事業育成のさがけとなった。また翌年には寺院が行っている日曜学校を高邁な信仰の「場」として宣揚するはたらきかけをはじめ児童教化の機関誌として『児童と宗教』を刊行する。

本誌の刊行がはじまった一九二二（大正一一）年は、真宗大谷派において日曜学校が盛んに寺院で開かれた時期であり、萌芽期から発展していく時期であった。本誌、武内了温の「創刊に際して」という巻頭の論稿にその繁栄の様子がうかがえる。論稿は武内の願い、また派内の関係寺院がはじめた日曜学校のあるべき姿を打ち出し、より充実した社会事業へ育成したいという指針として巻頭を飾っている。

本誌は教育勅語の背景としての宗教・児童福祉問題の一考案・児童文学・キリスト教などに対する言及も見られ、また子どものも徳教育や日曜学校の教案やカリキュラムも記載されており、近代教育の黎明、充実期における文化遺産として、その質と量において優れたもののひとつであるといえる。

保育・教育の原点として近代教育史や宗教史のみならず、ひろく近代史研究に資する文献として復刻するものである。

不二出版

児童を教化の正客とした

戦前期仏教界から学ぶもの

長谷川匡俊

現代社会は青少年の教育に関して、学校教育への過度な期待がかけられている反面、あまりにも家庭や地域社会の教育力を衰退させてきてはいないだろうか。家庭・社会・学校の三者にはそれぞれの役割や機能があるはずである。また宗教の社会貢献が論じられ、社会資源としての寺院への期待もけっして小さくはない。

ところで、仏教は長いあいだ児童を教化の正客としてこなかったが、近代に入るとその状況は大きく変化していく。戦前期の仏教界における児童教化活動の中心は日曜学校であった。キリスト教会で行われていた日曜学校の影響を受けながら、明治二〇年代から仏教界でも開設されるようになり、大正中期から昭和初期にかけてピークを迎える。

真宗大谷派は、明治四四（一九一一）年に大谷派慈善協会を設立。機関誌『救済』を発刊して教団社会事業に先鞭をつけると、大正一〇（一九二二）年一月社会課を設置し、翌年四月から本誌『児童と宗教』の刊行が始まった。同誌は昭和八（一九三三）年一月から『青少年と宗教』と改題され、同一二年八月まで全一六巻八号に及ぶ。取り扱われるテーマは、日曜学校を中心に、少年団、青年会、健児団（スカウト）等の諸相だが、関連して宗教教育や、教育と宗教をめぐる論稿が多く、宗教的情操の涵養に資する内容に満ちている。戦前期の教団における児童・青少年教化の全貌を伝える貴重な資料であるばかりでなく、宗教教育など今日的な課題に応答しようとする際、大いに参考になる文献である。

（大乗淑徳学園理事長）

「教」の時代」を照らし出す

谷川 穰

人別改めを担い、また葬式を一手にひきうけていた近世の仏教寺院。それが明治に入って、いかなる社会的役割を模索したのか、十分知られているとは言いがたい。近代日本社会を単純な「世俗化」で捉えるかぎり、仏教は歴史の後景に退くばかりである。だが実際は、貧民救済や監獄教誨に取り組んだり、説教や講演に飛び回ったりと、キリスト教からの刺激も受けつつ、寺院の外へ出て人々に接する僧侶の活動は近世以上に活発になっていく。

とりわけ、教員の兼務や学校・幼稚園の設置など、教育活動への参画は非常に盛んだ。一九世紀末、文部省は条約改正に伴う内地雑居に際して、公立私立を問わず学校における宗教教育を禁止した。しかしその後も、さまざまな形で仏教界は教育に関わり、昭和期には逆に宗教教育の必要性や正当性の主張が強まる。現在でも存続する仏教系私学は多いし、公立学校教員を兼務する僧侶も珍しくない。近世仏教が「掌握の時代」を過ごしたとすれば、近代のそれは「教」の時代」と称すべきであろう。

『児童と宗教』は、近代仏「教」がいかに「教」育に携わったか、その主体的活動の模索を如実に示す恰好の史料と言える。この雑誌が頻繁にとりあげた日曜学校という舞台は、子どもたちへの教育現場であると同時に、宗教と教育の両領域の関係性や境界をうかがいうる点でも、重要である。教える側が何を教育とし、何を信仰としたのか？ 学ぶ側の仏教観はいかなるものだったのか？ アジア太平洋戦争前の日本社会に、仏教が教育活動を介して息づいた、その姿の一端を知ることができらるだろう。

（京都大学大学院文学研究科准教授）

推薦します

▶第一四巻第五号（昭和一〇年四月）



